



鶴彬をたたえる集い会場の高松歴史公園

鶴彬が没して七十三年目の九月がやってきます。顕彰する会ではこ  
 としも「鶴彬をたたえる集い」を石川県かほく市高松の歴史公園・鶴  
 彬句碑前で執り行います。各友好団体からのメッセージを披露し、参  
 加者全員、句碑に献花して鶴彬を  
 偲びたいと思います。

また鶴彬川柳大賞（全国公募）  
 の披露、高松詩吟協会の皆さんに  
 よる鶴彬川柳の献句も昨年引き  
 続き予定しています。

その後会場を近くの高松産業文  
 化センターに移して記念講演会、  
 続いて顕彰する会の総会を開き、  
 今年度の決算報告、活動報告を行  
 い、新年度予算案、事業計画案を  
 審議します。

なお当日、会場では鶴彬の各種  
 資料を展示するとともに、新年度

9月11日(日)に

# 第13回 鶴彬をたたえる集い

記念講演、顕彰する会総会も

## 鶴彬通信

# はばたき

第5号

2011年8月20日

## もくじ

- ③～⑤面 「胎内の動き…」どちらが正しい句？
- ⑥面 神山監督と岐阜の一行40人が来訪
- ⑦～⑧面 深井金大名誉教授、鶴彬研究を語る
- ⑩～⑬面 連載「獄中の鶴彬」「新興川柳の軌跡」

の会員登録を受け付けています。（年会費千円、機関誌「はばたき」  
 購読料年間千円）  
 （当日の日程等は最終面16ページに掲載）

## 記念講演は北陸放送・川瀬裕子さん

「鶴彬」番組で日本民間放送連盟優秀賞

### 演題

## 「鶴彬」番組制作を通して」



二年前、鶴彬生誕百年、没後七十年の節目に神山征二郎監督による  
 映画「鶴彬 こころの軌跡」を製作し、全国的な上映運動を展開して  
 きました。小林多喜二ブームという追い風もあって「鶴彬を世に出  
 す」という私たちの思いは一定の成果を積み上げてきました。

映画に刺激され、文芸評論家・榎沢健氏による新しい鶴彬論「され  
 ど、鶴彬——抵抗する17文字」が出版され、さらに地元・石川県では  
 北陸放送制作の特別番組「暁を抱いて闇にいる蕾」が二度にわたって  
 放送され、昨年度の日本民間放送連盟優秀賞（教養部門）を受賞する  
 という荣誉に輝きました。まことに喜ばしいことでした。

そこで、ことしの「たたえる集い」記念講演会では、同番組制作に  
 携わった北陸放送ラジオ局のディレクター・川瀬裕子さんをお招きし  
 て、その動機や取材の苦労話などを語っていただくことにしました。

(②面へつづく)

# 石川にもこんなすごい人がいた!!

## 自分を貫いたカツコよさにひかれて

### 記念講演の川瀬さん、番組制作の動機を語る

川瀬裕子さんは、鶴彬を取り上げた動機として、「小林多喜二のよ  
うな人が石川県にもいたことを知って驚いた。生誕百年と聞いてぜひ  
取り上げてみたいと思った」と語っています。さらに「川柳の力強  
さ、すごさに感動した。自由にもが言えない時代に文字で自分を貫  
いたカツコよさに惹かれた。この鶴彬の生きざま、あきらめない強さ  
はいつの時代にも失ってはならないものと思うが、いまは理想に向  
かって体当たりをしていく人がいない。若い人たちへの刺激になれ  
ば」と番組の意図をもらしています。

番組では澤地久枝さん（作家）、吉橋通夫さん（作家）、岡田一杜さ  
ん（和）川柳社主宰）ら著名な人たちも登場しますが、澤地さんへ  
の取材では「鶴彬のことなら喜んで」と応じていただき、予定時間を  
大きくオーバーする熱の入れようだったこと、一時間の放送枠をCM  
無しで上層部が提供してくれたことなど、裏話“も披露していただ  
けると思います。

### 制作者の志の高さを評価

なお、受賞作「鶴彬生誕100年特別番組『暁を抱いて闇にいる  
蕾』」は審査にあたって次のように評されています。

「昭和初期、民衆の立場で反戦・反権力の『川柳』を詠み続けた石  
川県の川柳作家、鶴彬。その句から当時の世相をうかがい知ることが  
できる。彼は自由・平和・平等を希求し、プロレタリア川柳を貫いた  
末に、自分の信条を曲げず治安維持法で検挙され、29歳で短い生涯を  
閉じた。番組は彼の詠んだ句から時代を振り返り、彼がどう生きてたの  
かをたどる。権力に媚びることのなかった生き方が丹念に調べられて  
おり、制作者の志の高さを感じさせる」

## 鶴彬を語る

二〇〇九・一一・三〇放送の北陸放送ラジオ番組  
「暁を抱いて闇にいる蕾」から

澤地久枝さん（作家） やっと少年といえるようになった鶴彬  
が、知らない大阪の都市に出て行って苦勞もしただろうし勉強も  
したでしょうね。あの時代はいまから想像できないほど左翼運動  
が高揚した時代なんです。だから多少なりと気持ちにしゃんとし  
たものを持っていて、生きるってどういうことか考えた人たちは  
みんな左傾しています。しないほうが珍しかった時代があるん  
ですね。時代の空気の中で鶴彬はそれを読み取ったんだと思いま  
す。

### 吉橋通夫さん（作家）

幼いころからの友人たちが何人かいて  
彼を支えていた。赤化事件で監獄に入って出てきたあと、どこに  
も身の寄せようがない。親戚は世間の目があるから自分のところ  
には来てくれるなということでも身の寄せるところがない。八カ月  
ほどの間、沖野平吉さんとか竹中儀三郎さんとかが自分を置いて  
くれたという、前科者を、しかも思想犯ですから当時としては世  
間の目が怖い。そういう人を置いてくれた友だちがいたというの  
は当時としてはすごいなあと思う。そういう意味では、ふるさと  
は彼にとっては自分を支えてくれたところだったんでしょね。

### 澤地さん

全く日の当たらない中で、自信を失ったりしない  
で自分の信ずるままに生き、書き、死んでいった人なんですよ。  
胸を張って一生懸命生きていたなと思う。彼の遺品は墨壺とすり  
減った下駄だけ。写真だけあった。そこに足の指跡が黒く残って  
いる。ちびた下駄しか残さない。でも、食べるのがカツカツだっ  
ただろう生活をしていて、恋もしただろうけれども実ることな  
く、立派に死んでいったと思う。そういう人に、私は心惹かれま  
すね。

「胎内の動きを知るころ骨がつき」  
「胎内の動き知るころ骨がつき」

……どちらが正解？

岩手県在住の東北川柳連盟理事長・佐藤岳俊さんから、投稿がありました。浄専寺（石川県かほく市高松）に二年前建立された鶴彬の句碑「胎内の動き知るころ骨がつき」に間違いがあるというご指摘です。顕彰する会の幹事会でもいろいろ議論になりました。佐藤さんの投稿とともに、関係者の見解を紹介し議論の輪が広がることを期待します。

誤った本が多い

岩手県 佐藤 岳俊

東日本大震災の余震の中で夏をむかえる。このごろ気にかけていることがあった。それは鶴彬の川柳作品「胎内の動き知るころ骨がつき」が誤って掲載されている本等が多数を占めていることである。

特に第16回「鶴彬」川柳大賞―作品募集―のパンフレットも誤って掲載されているので正さねばならないと思ったからである。そこで私の持っている鶴彬に関する本や小冊子を調べて見た。正しくは「胎内の動きを知るころ骨がつき」であり、誤りは「胎内の動き知るころ骨がつき」である。この句の中



浄専寺境内にある「胎内の…」の句碑

の「を」を落としているのが誤りである。なぜこの句の「を」を落としているのか、私には分からない。「を」を入れて正しく扱っている

本を掲げる。「二叩人編 鶴彬全集」「二叩人編著 反戦川柳人 鶴彬」「深井一郎著 反戦川柳作家 鶴彬」「二叩人編 反戦川柳人 鶴彬の記録第三巻」「奥美瓜露著 石川近代川柳史」「尾藤一泉編 鶴彬の川柳と叫び」「鶴彬こころの軌跡 シネフロント」「川柳総合大事典」「川柳総合事典」「尾藤三柳著 川柳の基礎知識」「時実新子著 川柳を始める人のために」「秋山清著 近代の漂泊」「田辺聖子著 川柳でんでん太鼓」「田口麦宏著 川柳技法入門」等である。それ以外の本では誤って掲載されている。

ここにあって誤って載っている本を記す。

「岡田一と著 鶴彬の軌跡」「岡田一杜、山田文子編著 川柳人 鬼才鶴彬の生涯」「木村哲也編 手と足をいだ丸太にしてかえし」「吉橋通夫著 小説鶴彬」「棚沢健著 だから、鶴彬」「牛山靖夫著 反戦川柳人鶴彬を語る」等であるが、私が最も残念と思ったのは「鶴彬はばたく―生誕百年記念祭と映画

「鶴彬こころの軌跡」製作の記録」の中の「鶴彬句碑マップ」にあった「浄専寺の句碑」が「胎内の動き知るころ骨がつき」と記されていたことである。この句碑は誤りである。

句碑「胎内の動き知るころ骨がつき」

定形律のリズム感

「和」川柳社主宰 岡田 一杜

かほく市高松に建立されている鶴彬句碑の一つに「胎内の動き知るころ骨がつき」がある。これは「川柳人」一九三七年十一月号に発表された次のような六句のうち最後の作品。そしてこの年十二月に逮捕され、当時は臨時監獄になっていた東京野方署に収監されているので、この句が鶴彬の絶筆とされているもの。

高梁の実りへ戦車と靴の鉾  
屍のいないニュース映画で勇ましい  
出征の門標があつてがらんどうの小店  
万歳とあげて行った手を大陸において来た  
手と足をいだ丸太にしてかへし  
胎内の動き知るころ骨がつき

いま最後の句で「胎内の動き―」の下に助詞の「を」が入った句が元句で正しいという説が出ています。するとこの一連の作品は五句目の「手と足を―」以外は破調の句となってくる。かつて、かたくなに定形を唱えていた鶴彬は、自由律川柳を発表していた鳥三平（中島国夫）と討論を重ねていたが、やがて



は自らも自由律川柳をつくるようになり「しやもの国綺談」にみるように、連作での秀れた詩を創っている。

この一連の作品も一句目から四句目までは、内在的リズムが整っているので自由律だが、五句目「手と足を」は定形作品。

戦後はじめて鶴句を発表したのは「人民川柳」(東京都北区滝野川・発行人石上太郎)で、その二号誌(一九四九年七月発行)では「人民川柳予選集」に「胎内の動き知るころ骨がつき」と記されている。当時多くの川柳人に「手と足を」と共に膾炙されていた川柳でもある。

私は一九八〇年(昭55)に「鶴彬の軌跡」と題して、彼の作品、評論を中心に川柳での活躍を伝記的に述べて発刊したが、この中で「知るころ骨がつき」と記している。

またこの冊子を底本として一九九七年(平9)に出版した「川柳人・鶴彬の生涯」でも「を」を入れていない。しかしこの発行の十年程前(一九八七年・昭62)に発行した「鶴彬句集」では「動くきを知るころ」としているのだが、一九八八年発行の日本プロレタリア短歌・俳句・川柳集」の中では「を」抜きとして選んでいる。この折は出版社からの掲載コピーより選じたのだが、作品に「を」が入っていたかどうか憶えがない。多分に五と六句目を定形としてのリズム感から抜きとったのかも知れない。

これに似た事は他にもある。金沢市の卯辰山公園の碑は「暁を抱いて闇にゐる蕾」とあるが、この句が載った「蒼空」では「暁をいだいて」とある。しかし、除隊後に同年兵

だった人に渡した鶴彬の真筆短冊は「暁を抱いて」となっているので私はこの短冊の句を採っている。

◇ ◇  
〈胎内の動きを知るころ骨がつき〉

この句が「川柳人」誌に載っている本当の句であり、故に句碑の句は間違いとする説と、戦後まもなく鶴彬を知る人々の間で膾炙されていた定形リズムでの「胎内の動き知るころ」を採る私などがいる。

前述したように四句目までは自由律作品だが五句目の「手と足を」は定形律。そして六句目のこの句は自由律ではなく定形の句と思われるが、中句に「を」入りでは字余りでリズムを毀してしまう。

この字余りの「を」が問題視されているのだが「動くきを」と「を」入りは口誦性を妨げる。今日のかなづかいでは「を」は助詞以外には使用せず、「を」は「お」になるが、戦前は男・雄は「を」であり女寺は「をんなてら」等だが、そこまで考えても「を」入りは無意味で誤植ではないかと思う。

(金沢市在住)

## 「川柳人」281号を探せ

かほく市 角島 広治

川柳界の大御所であり、鶴彬の研究者である佐藤岳俊さんから大変なご指摘をいただいた。川柳に関しては門外漢の私だが、思うところを述べてみたい。

「浄専寺句碑の誤り」については、先に佐

藤さんから城戸寿子さん(鶴彬の姪)あてにお便りがあり、今夏までに句碑を直すよう記されていた。それを拝見して二年半前を思い起こした。浄専寺住職・平野道雄さんに、神山征二郎監督から送られてきた「胎内の：」揮毫を見せていただき、力強い筆致に感心するとともに「動き知るころ」と「を」がないことに気づいた。しかし本によって表記がまちまちだったことから、どちらが正しいかとの判断はストップしたままになっていた。

いま、佐藤さんの指摘を受けて考え込んだ。句碑を手直すことは大変なこと。「正解」はどう考えたらいのか。完全正解は作者に聞くしかないが、本人は盛岡の墓の中で、これは不可能。次に正解に一番近いのは初出の原典に当たること。しかし昭和十二年十一月十五日発行の「川柳人」281号は、現在、国内の公立図書館のどこにも存在しない(石川県立図書館調べ)。別の方法で同誌を探し出すしかないが、早急には難しい。

探し出すことができ「正解」が判明したとしても、「百パーセント正解」といえるかどうかかわからない。なぜか。二つのマイナス要因が付きまとうからである。一つは出版時の誤植の可能性。もう一つは作者の決定稿であったかどうかという点。鶴彬には、他の句で習作と見られる類似句がいくつも見られることから、そうした配慮も完全には排除できないと思うのだ。

この二点は作者が生存していない以上、確認は不可能。よって考慮からはずし、「川柳人」281号所収の句に合致するかどうかを

もって正解とするしかないが、281号が発見されるまでの間、最も正解に近いと思われるのは、やはり権威ある研究者、川柳人たちの判断であろう。ところがこの権威ある人たちが割れている。意識的に選択されたのか、無意識的記述によるのかわからないが…。

◆「を」有り派：一叩人、深井一郎、秋山清、田辺聖子、佐藤岳俊さんら、澤地久枝著「昭和遠い日 近いひと」も

◆「を」無し派：岡田一杜、澤地久枝（全集ほか）、木村哲也さんら

柳誌や新聞を直接当たって鶴彬作品の収集に奔走した一叩人が最も信頼度が高く、他の人たちは一叩人の「全集」を底本にしていると考えられるが、一叩人「全集」を基に増補改訂した澤地「全集」でも一叩人と同じではない。①引き写しミスなのか ②誤植見逃しなのか ③原典の「川柳人」に当たったの改訂なのか… ④ならばこれが正解となるが、同書あとがき「復刻にあたって」で澤地さんが書いているように、「川柳人」は国立国会図書館所蔵の昭和二年一月（172号）と昭和十年八月（273号）しかなく、281号には当たっていない。

澤地さんという「鶴彬の権威」に全面的に寄りかかるとはいかないのである。その理由をさらに挙げるならば、例えば、澤地久枝・佐高信連載対談「世代を超えて語り継ぎたい戦争文学」（「世界」2007年5月号）がある。この中では「胎内の動きを…」となっているが、これが岩波書店から出た単行本（2009年6月）になると「を」がない。もちろん澤地さんの語りの部分である。澤地さんがそこまで気を配ることなく語った

のか、編集者が無頓着だったのか。また、「文芸春秋」1998年10月号所収の澤地久枝「鶴彬全仕事」でも「を」無しで、ひとりの方が書いているものでもバラバラなのである。

もつと極端なオースリテイ・ミスもある。一叩人著「評伝 反戦川柳人・鶴彬」（鶴彬研究会、1983年5月15日発行、文庫版）に「胎内に骨がつく頃骨がつき」の句が紹介されている。鶴彬の習作句ではない。「川柳人」281号に発表された鶴彬最後の六句の一つとしてである。明らかに一叩人の記憶違いとしか考えられない。権威ある研究者でもこうした錯誤はあるので、引用もすべて完全とはいえない。

さて、鶴彬についても書く人はこの「胎内の…」の句をはずすことはない。先に書かれたどの人の著書を基にしたかで、必ず二派に分かれることになる。さかのぼれば一叩人「全集」か澤地「全集」が水源ということになるのか。だからどちらの派が多いか、多数決で正解が決まるわけではない。

そこで、「完全なる正解」はしばらく宙づり、保留状態にして、川柳として、文学作品として「を」の有無の妥当性を論じ合うのも一興かと思われる。門外漢が余計なおせっかいかもれないが、短詩型文学にはなくもがなの助詞は省いた方が歯切れがよいという意見もある。う。「を」の必要性、なくてはならぬ理由を考えてみるのもよからう。正解のないのが川柳の面白いところという、両派どちらにも軍配を上げない選択肢もある。さらなるカンカンガクガクを期待したい。

（鶴彬を顕彰する会会員）

鶴彬仕訳帳

（海を詠う）

- \* 海鳴りが秋の心へ強く響き (十五歳)
- \* 海鳴りが弓張り月を凄くする (十五歳)
- \* 風と波の 奮闘に泣く浜の女 (十六歳)
- \* 暴風と海との恋を見ましたか (十六歳)
- \* ふと水平線から雲が湧いた (十六歳)
- \* 地を噛まん夜の海々の白き歯よ (十六歳)
- \* 海鳴りが床の下から背へひびく (十七歳)
- \* 海鳴りの音絶雪女郎の衣ずれ (十七歳)
- \* 波、闇に怒るを月に見つけられ (十七歳)
- \* 海の蒼、空の青さと相通じ (十七歳)
- \* 波、波、波、男、女、獣めく (十七歳)
- \* 海の蒼さは太陽の認識不足だ (十七歳)
- \* 秋の海、ひとりの男―海の精か (十七歳)
- \* ふんぷんと海にふる雪海となる (十八歳)
- \* 波おこる一点四季の海の音 (十八歳)

◆投稿歓迎

【次号締め切り10月末日】

- 鶴彬への思い
- 作品鑑賞
- 鶴彬やその仲間たちのエピソード、情報
- 「あの時代」について思うこと
- はばたき1〜5号の感想・批評
- その他、鶴彬に関すること

# 神山監督と岐阜の

## 一行四十人が来訪

### 郡上一揆の会、「鶴彬」に連帯

さる6月5日、岐阜県・郡上一揆の会40人の皆さんが、神山征二郎監督とともに鶴彬の生誕地探訪ツアーとして石川県かほく市高松にやってきました。監督は二年余ぶりの再訪で、監督の出身地・岐阜で映画「郡上一揆」を撮った縁で出来た「一揆の会」の一行を案内する形で訪れました。鶴彬の映画製作の折、監督の「基地」だった浄専寺の住職・平野道雄さんを通じて連絡があり、顕彰する会では長谷久人会長以下七名で出迎えました。

高松歴史公園でバスからにこやかに降り立った監督と久々の再会を喜び合いい、続いて下車した皆さんに鶴彬について簡単に説明。「枯れ芝よ団結をして春を待つ」の句碑を囲んで記念撮



鶴彬句碑と神山監督を囲んで記念撮影する岐阜の一行

影をしました。次いで約五百メートル移動して鶴彬生家跡・喜多義教さん宅前庭の「可憐なる母は私を生みました」と浄専寺境内の「胎内の動き知るころ骨がつき」の二つの句碑に案内しました。この二基はともに神山監督の揮毫によるもので、二年前の生誕百年を記念して建立されたとの説明に、岐阜の皆さんは大変感慨深げでした。浄専寺の句碑については平野住職より説明がありました。

この日は好天に恵まれたため、「ぜひ海を見たい」ということになり、三々五々散歩しながら海へ向かいました。白い砂浜を踏んで波打ち際へ。波の穏やかな日本海を眺めながら、監督から鶴彬と海との思いや、砂浜でのロケのあれこれなどを語ってもらいました。

昼食懇親会は近くの料亭、河北亭で。鶴彬を顕彰する会から長谷会長の歓迎のあいさつと、郡上一揆の会・和田昌三会長のあいさつがあり、和やかにお互いの活動を紹介し、また今後の交流について話し合いました。

昼食の後は浄専寺に戻り映画「鶴彬」この軌跡」上映会。平野住職と神山監督からそれぞれ映画についての説明があり、一時間半の上映が終わると大きな感動の拍手が起こりました。最後に和田会長からお礼の言葉があり、映画鑑賞会を終えました。

この後、顕彰する会、一揆の会それぞれに入会手続きをする人が双方にいて交流会は大きな成果をあげました。岐阜の皆さんは午後三時過ぎ、再会を約し名残を惜しみながらバスに乗車、大きく手を振って帰途につきました。なお和田昌三さんはその後、この鶴彬探訪旅行の印象を次のように歌に詠んでいます。

ロケされし海岸に立ち熱っぽく

鶴彬を語る神山監督

和田昌三

(治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟機関誌「不屈」2011年7月15日発行、445号)。

郡上一揆の会の一行を案内するという機会に恵まれた神山監督は、二年ぶりの高松訪問で、せっかくの機会だからと、一行と別れて一泊することになりました。町内のロケ先を懐かしそうに散策したあと、浄専寺で関係者と歓談。監督の師匠である新藤兼人監督のEPソードなど披露してもらいました。また、鶴彬の妹・文子の子役をこなした岡田心ちゃんもおばあちゃんに連れられてやってきました。この春小学校に上がったこちゃん、かわいらしさプラス美人顔に変身して監督に答えていました。

夜は河北亭で監督を囲む懇親会が開かれ、顕彰する会幹事ら十五人が出席、和気あいあいと映画談義に花を咲かせました。

また、鶴彬の映画プロデューサー・平野寛さんも岐阜から駆けつけて合流し、鶴彬映画のDVD化計画について検討、今後早急に具体化する事になりました。



懇親会で挨拶する神山監督



# 深井一郎名誉教授

## 鶴彬研究を語る

長年、鶴彬の研究を続け、その著書「反戦川流作家 鶴彬」で一九九九年泉鏡花記念金沢市民文学賞を受賞された、金沢大学名誉教授・深井一郎さん（鶴彬を顕彰する会顧問）に研究の一端、エピソードなどを語っていただきました。体調万全とはいえない身で、長時間とつとつと話されるその姿勢に、研究の跡を引き継いでいって欲しいとの願いが込められているように感じられました。

そもそも鶴彬のことを調べようと思ったのは、ある先生からその名を聞いたのがきっかけでした。北國新聞社へ行くと、資料室には昔の新聞がすべて残っていました。夕刊には喜多一児の名で投稿され、二十数行載っていることもありました。丹念に調べていきましたが、一年ほどたったころ、年間の統計がまとめられ朝刊の記事になりました。

そのころ、森田一二さん（註1）や奥美瓜露さん（註2）に会うと、鶴彬の作品の載った新聞の切り抜きが赤線で囲んで保存されていました。

四高時代の教官と話をしている、七連隊赤化事件で鶴彬とともに検挙された角田通信（労働者）などのことを知って（軍隊の赤化事件は富山など全国的に多くあった）、鶴彬

を研究テーマに取り上げることにしたのです。

そのころ、金沢大学近代史研究会には宮本憲一さん、前田慶穂さんらがいて、前田さんはサークル長でした。頭の切れる鋭い人でした（いまも金沢でご健在）。前田さんとは後（八月号）に「反戦川柳作家——鶴彬の肖像」を書きました。石川県における社会運動史刊行会内に設けられた鶴彬研究班の成果を基にまとめたものですが、これが鶴彬研究の第一歩でした。

北國新聞社では日が差し込む書庫で、夕刊を全部調べ投稿された鶴の作品はすべて書き写しました。当時もコピー機はありませんが高くて手が出せませんでした。青焼きは使えませんでした。

鶴彬は自己改革の激しい人でした。川柳の世界では少しずつ変化していった、突然大きく変わっている。真っ直ぐな人だったと思



鶴彬研究について語る深井一郎名誉教授（右）

います。だから本当の竹馬の友はいなかったのではないのでしょうか。三人から五人ぐらいの川柳仲間はいたでしょうか。

### 母への哀れみを込めて詠む

人は普通、十七、八歳で変化するものですが、鶴は十五、六歳で変化して既に大人の句を詠んでいる。母親のことが影響しているのかどうか、自分では何一つ触れていないのでわかりません。

「可憐なる母は私を生みました」の「可憐」の意味は、昔の使い方では、きれいなとか美しいという意味ではなく、可哀想とか哀れみ、苦しみを示すもので、言葉の時代性で読み取る必要があります。鶴は何で苦しんでいたのか。養子縁組の解消問題と関連があるのかどうか、ですね。この句は、鶴自身はいい句だとは思っていなかったようです。

鶴彬の句は社会問題を扱ったものが多いですが、戦前のあの時代、新聞では殺人や細かい事件は掲載されているけれども、社会的事件は深く、広く報道されないのが背景となった社会問題を当てはめるのは、なかなか大変ですね。鶴の情報源はラジオ、新聞のほかに川柳仲間からのものもあったでしょう。細かいことはわからなくても、背景や全体のアウトラインがわかれば判断力で表現できます。事件、人間、時代がつけられれば句になるでしょう。

### 五・七・五の三つダンゴ

句を作るのは自分自身をみつめ、自分の感情（情緒）と理性との統合作業です。五七五

という三つのダンゴに中身を詰める作業です。かつて岩手の宇部功さんが子供たちへの川柳指導について金沢で話をされたのですが、別々の言葉を詰めた三つのダンゴで違う内容のひとつの塊になり、新しい価値が生まれるという説明に共感を覚えました。

最近、「だから、鶴彬——抵抗する17文字」という本が出ましたが、プラス面とマイナス面がありますね。著者の本音が出すぎていて、一つ一つの句の説明は形が整いすぎていて、一つ一つの句の説明は形が整いすぎていて、読み手としては読みやすい、理解しやすい形になっていきますが、流れとしてはマンガ的ですね。世界的視点で書いていくように見えますが、もう少し配慮が必要に思えます。書名の「だから」はどういう意味を込めているんでしょうね。

註1 もりた・かつじ 一八九二年、金沢市生まれ、柳号・森田森の家、山村浩。一九二二(大正十一)年、名古屋で新興川柳誌「新生」を独力で発行し川柳の革新を宣言。鶴彬に強い影響を与える。プロレタリア川柳の論客として論陣を張ったが戦後は平穩な国鉄マンとして生涯を終える。一九七九年没。

註2 おく・みかる 一八九四年、金沢市生まれ、戦後、蟹の目川柳社創立同人に参加、その後「川柳甘茶くらぶ」を設立。一九九〇年出版の句集「浅の川」で泉鏡花記念金沢市民文学賞を受賞。その後、同賞選考委員、各種川柳大会の選者も務める。一九九八年に石川県文化功労賞を受賞。二〇一一年没。

宇部功「子どものころ五七五」から

SOSうえた子どものさけぶ声	小林 有記
ストーカー足音させず後つける	成谷 佳子
お母さん音読聞いてねているよ	蒲田 彩香
包丁のゆかいなステップいいひびき	遠藤咲百合
シュートきめぼくの右足ほほんだ	熊林健太郎
足跡が歴史の上の大発見	小野寺智也
木のねっこかみの毛みたい足のばし	清水 修平
先生は字を見てわかる名前なし	村上 光
ルンルンきげんよければ字もきれい	伊藤 恵利
古い本わけのわからん字がならぶ	中里 将吾
ポストあけ心がおどる見慣れた字	大堂みなみ
ふしぎなぼくがおこると字もおこる	菅 幸也
大人の字ふにやふにや文字だへんな字だ	遠藤真由美
渋滞で舌打ちの数増えてくる	三浦 紗希
近くでも車ででかけ不健康	北野澤 洸
排気ガス車の弱点そこにあり	小野寺昭仁
自然破壊葉っぱが助けを求めている	横尾 将司
青虫が食べる葉っぱはおいしい葉	白椏 光平
葉っぱがね風の合図で結婚式	松坂 幸太
もみじちゃんがりぼうしでかわいいね	田中 智佳
杉の葉がストーブの中でおどっている	伊藤 香織
葉っぱがね化石になっていきている	千田 柊
雨の日はとっても元気な葉っぱたち	角 真唯子
ふまれてもがんばる雑草になりたいな	大堂みなみ
虫たちが葉うらで休む雨の午後	伊藤悠利枝
寒い朝葉っぱのふとんができていく	遠藤健太郎
葉がゆれて嵐の前の予告かな	津志田りえ子

きれいだな天然水をゴックゴク	菅原 諒平
水が増え世界がしずむ温暖化	三浦 里美
いいないなきれいな水で泳ぐ鮭	斉藤 恵太
無駄遣い水の神様おこっている	川端 孝典
川の水新かん線だゴーゴー	三浦 拓生
水たれて石に穴あき神秘的	滝川 隆太
水滴がやさしく落ちる雨あがり	小野寺美穂
節約だおふるの水でおせんたく	鈴木はるか
水仕事母の手つらい冬がくる	菊沢奈津美
水たまり小さな虫のプールだよ	西 尚貴
マラソンは体の水分ぬすんでいく	吹切 千夏
洪水だ水が悪魔に変わったぞ	成谷 勇樹
温暖化水は増えるが陸は減る	遠藤 光太
水だつてそまつにするな生きてるぞ	津志田りえ子
冬の水我が手尽きさす刃なり	斉藤 未来
そよそよと姿はないがおどる風	成谷 佳子
ほつとする母の姿に笑みこぼれ	三上 恵美
いつまでも母の姿におびえる	浦田 諒介
帰り道母の姿にほつとする	伊藤 未来
シンナーは自分の姿変えていく	小野寺昭仁
姿勢から態度を見抜く教師の目	津志田りえ子
姿見をする母の顔うれしそう	小野寺美穂
ストーカー君の姿はかげぼうし	小森 茜
鏡には心の姿うつらない	長内 利恵
お父さんねてる姿はなさけない	遠藤 隼也
春待てず姿現わすふきのとう	伊藤悠利枝

(学校名、学年は省略しました)



# 映画「鶴彬 こころの軌跡」を観て

— 佐高信氏への書簡より抜粋 —

派遣ユニオン・東京ユニオン 高井 晃

●「鶴彬」の映画を見ました。鶴の生地「石川県河北郡高松町」は私の母の故郷です。父と母は満州から引き揚げて、隣の漁師の網小屋にころがりこみました。親父は、イカ釣りなどをしていたようですが、とても食っていきせず、大阪・東成区の父の姉の家を頼って一家で移住しました。

戦前は、国の政策でたくさんの人たちが満州へ、満州へと海を渡りました。父もまた「満州飛行機」の職工として暮らしていましたが、戦局急を告げ、姉を妊娠した母は一足先に帰国しました。姉は残留孤児になり損ねたわけです。

父はソ連軍に逮捕、貨車に載せられソ満国境を越えましたが脱走し逃げ帰りました。日本人とばれて切り付けられ額を13針、麻酔なしで縫いました。おっと話がそれました。映画について書いた駄文の一部です。

●映画「鶴彬 こころの軌跡」を観た。鶴は、日本が戦争に突き進む時代に「プロレタリア川柳」を唱え、その作品の力によって権力から弾圧を受けた川柳人である。

（佐高信氏は「権力にとつて鶴彬の川柳は恐るべき凶器となる。この映画で私たちは、その『こころの軌跡』を知り、それを強力な武器とする」とメッセージを本作に寄せた）

鶴彬は一九〇九年生まれ。彼について石川県の労働運動家からその存在を聞いた。しか

も、鶴の生まれ育ちは石川県河北郡高松町（現かほく市）、私の母の故郷である。満州から引き揚げてきた父母は、高松の隣の漁師小屋で暮らし私を産んだ。大阪に移住した私は、小学校のころは毎夏、家業に忙しい大阪から送られ高松ですごした。

鶴の本名は喜多一二、「喜多さん」は高松に多い苗字である。高松は、撚糸業や羽二重織物、砂丘を利用した葡萄生産で知られていた。

●映画の字幕に地元で協力したボランティアの筆頭に私の従兄弟（母の本家の婿）の名があった。自民党町会議員として長年勤め、元防衛庁長官瓦力の弟分・長谷久人（鶴彬を顕彰する会会長）である。世の中は面白いものだ。地元高松に、いまでは鶴の句碑がある。

## 枯れ芝よ 団結をして春を待つ

それにしても川柳といい、俳句といい、自由律のもつ「破壊力」に感服せざるを得ない。内在する意志が形を突き破り、噴出した力だ。種田山頭火、尾崎放哉らの自由律俳句、そして鶴の自由律川柳だ。あと三首、鶴の自由律川柳を記す。

## 手と足をもいだ丸太にしてかへし

暁を抱いて闇にいる薔

万歳と上げていった手を大陸へおいて来た

（高井晃さんのプロフィール）一九四七年、

石川県高松町生まれ。早稲田大学第一政経学部政治学科在学中に六九年東大・安田講堂闘争で大学中退。地域労働運動に入り、七九年

現在の東京ユニオン設立に参加、委員長に。その後、コミュニティ・ユニオン全国ネットワーク事務局長、阪神大震災被災労働者ユニオン設立、派遣労働ネットワーク設立、全国ユニオン設立・初代事務局長。現在NPO法人派遣労働ネットワーク理事、労働組合東京ユニオン執行委員、企業組合スタッフフォーラム理事長など。主な著書に「いのちを守る労働運動」（論創社）、「闘うユニオン」（旬報社）ほか。東京在住。

## 鶴彬仕訳帳

（ピュアな眼）

- \* 思い切り笑いたくなった我 (十五歳)
- \* 大きな収穫総てを忘れた喜び (十五歳)
- \* 桃割の妓の瞳だけ欲しいです (十六歳)
- \* 舞妓の瞳の中に住みたし (十六歳)
- \* 春を吸う白砂の歓喜に腹這いて (十七歳)

（軍靴の響き）

- \* 日章旗ベツタリ垂れた蒸暑さ (十五歳)
- \* 悲しい遊戯を乗せて地球は廻る (十五歳)
- \* 兵隊ごっこ男の子等計りです (十六歳)
- \* 突いている奴は後から又突かれ (十六歳)

（女性哀史）

- \* 籠の鳥歌つて女工帰るなり (十五歳)
- \* 桃割の瞳 何も彼も諦める (十五歳)
- \* 縮まって女工未明の街を行く (十五歳)
- \* 女工達 声を合わせて唄い出す (十五歳)
- \* 親の命日を知ってる伎の瞳 (十五歳)
- \* 香水買いに来た少女は工女です (十六歳)

## 獄中の鶴彬 (三)

青木 英夫

逮捕されて、深川より野方署に運ばれた鶴彬は、「川柳人で弾圧をうけたのは自分が二人目だ」と意気ケン高たるものがあつた。(江戸時代、寛政の改革で川柳人が一人遠島になつたことを指して、鶴はこういつていたという)。この事件では数人の検束者を出したというが、いづれも程なく釈放されて、鶴一人が残つた模様である。(人民川柳の広岡義明氏も一ト月程拘留をうけた)。鶴彬は「蒼空」の中心として、高齢の発行責任者井上信子氏の身代わりという意味もあつたようだ。ともかく弾圧当局にとつて、鶴彬は石川時代よりマークした最も憎むべき対象であつたに違いない。川柳の問題をはなれても、当局は鶴彬一人をズバ抜けて憎悪したに違いない。

### 老闘士・橋浦時雄も同じ獄に

程なく12月15日、「人民戦線事件」で多くの検挙者が野方署に入つてきた。宗教関係の人々もいた。この事件は、フランスで成功し日本でも遅まきながら緒につきはじめた、党派を越えた幅広い反ファシズム統一戦線の芽を刈りとつた。野方署に検挙された中には平林たい子氏や橋浦時雄氏がいた。橋浦時雄氏は民俗学者橋浦泰雄氏の実弟で、明治の末年、早稲田大学の学生時代に已に、大逆事件の關係で幸徳秋水や片山潜などと共に検挙されたことがあり、アナキストを経て大正十二

年日本共産党の創立者の一人となつた。後に日共から離れたが、明治、大正、昭和三代に亘つて、投獄された不屈の老闘士である。同じ居住でやつていた生活協同組合運動を通して、運動の有力な参加者であつた剣花坊夫妻と親交があつた。そういう経歴のある橋浦氏が入つてきたので、野方署の検挙者達は落着きを取りもどしたようだった。その橋浦氏は、きびしい闘争歴にもかかわらず、気の優しい一面があつて闘士型ではなく、警察との接渉も熟練していて当りが柔らかだった。これに対し一徹の正義派まる出しの鶴彬や、気丈の平林さんは、断乎として当局の人権じゅうりんを糾弾し、野方署を手こずらせた。鶴彬が鉄柵をへだてて、巡査部長とはげしくわたり合つと、「署長を呼べ！」と平林さんの声があつた。コンクリートの廊下にはねかえつた。やがて寒い冬がやつてきた。

### 泥棒と抱合つて寝る寒さかな 血を吐いた同志の跡に坐らされ

鶴彬

鶴彬の居た野方署第六房は、且て全評の斉藤という人がいて嗜血したことが話されていゝた。ところがこれについては実に愉快な話がある。前記斉藤は歯が悪くて、或時歯ぐきから血を出した。その時彼氏は大声で「大変だ嗜血だ、嗜血だ」と騒いだ。日頃彼に暴行を加えていた警察はすっかり狼バインして、急ぎ保釈で出した。すると、彼氏はうまくズラかつて地下に潜つてしまった……。その話は皆娑婆にいる時間知つていた。だから、野方署の看守が、頑強な鶴彬に「貴様のようなヤツは、斉藤同様肺病でクタバらしてやる」と恐喝しているのを聞いて、皆腹の中のおか

しさを殺すのに骨折つたという。知らぬは野方署ばかりなり、だつたのだから。

越えて昭和十三年、日本の内外は、戦争とファシズム、反戦と民主主義の二つが激しくぶつかり合いもみ合った。1月16日、政府は「国民政府を相手とせず」の声明を發して、どんな欲な中国侵略の魂胆を明らかにした。二月に入つて「人民戦線事件」の第二次検挙があり時を同じくして、全農、日農の合同による反共、反人民戦線の「大日本農民組合」の結成と、社会大衆党の「粛党工作」——党内の人民戦線派の除名が行われた。本場のフランスではこの年、人民戦線内閣が相次いで成立と瓦解をくり返し、進歩と反動が拮抗した。二月にはロンドンで国際平和運動連盟の呼びかけで反日大会が開かれ、米、英、ソを含む廿一ヶ国の代表が参加して、日本の対華侵略を非難した。然も、欧州最強の共産党の狂気の様な弾圧によつて復活したドイツ帝国主義は三月にオーストリアに進駐し、次いで合併を宣言、ヨーロッパの天地に再び戦争の黒雲が張り出しはじめた。にもかゝらず、ヨーロッパの支配階級は、ミュンヘン会談によつてナチス、ドイツに恥ずべき緩和政策をとつた。同穴のむじなの彼らは、日本も含め東西呼応して、対ソ戦争への準備を底深く用意したのである。日本国内では、政府は四月一日国家総動員法を公布し、七月三十日には産業報告連盟が創立され、これに依つて、労組の産報運動支持声明と、経営者も含めた露骨な御用化改組が先を争い、戦時動員体制を強め、十一月に入つて近衛首相は、東亜新秩序建設を声明した。だが眼を大陸の西の辺境延安に向けるならば、この中国の赤い星、毛

沢東は、この戦争は、民族解放、人民解放につながる、地上から戦争を消滅させる決定的な第一歩となる国際的 antifascism 戦争に発展し現在の中国の守勢の段階にかゝわらず、必ず相持段階を経て、遂に中国が勝利するとういう、この戦争の運動法則を科学的に解明した。歴史的な「持久戦論」を発表していたことを我々が見る。まこと、歴史は、この時、毛沢東理論の動かしがたい証明の礎石を用意していた。日本軍の「即時決戦」の呼号にかゝわらず、中日戦争は局地戦争に止まらず、底なしの泥沼に落ち込んで行きつゝあつた。日本国内の社会運動はこの年、自由主義的教授の追放と、各所の共産主義者グループの再建活動と、その弾圧が目立った。

### 狂気の沙汰、好戦川柳に血道

柳壇では戦争川柳が幅をきかし出した。後に「番傘」に「陣中柳樽」、「川柳研究」に「聖討柳樽」などの戦争川柳専門の頁が生まれた。筆者は、懸案の「川柳人弾圧事件」の正確な年月日をたしかめるべく、冬の日、国立上野図書館地下の雑誌資料室に籠って当時の主要新聞と柳誌を洗ったが、遂につかめなかった。鶴の死亡についても同様だった(昭和十三年九、十、十一月の各誌の細かい柳壇消息欄をしらみつぶしに見たがそれさえも)。それはともかく、この川柳人の上にもふりかゝってきた弾圧に対し、これら柳誌が一言半句も触れようとせず、同じ川柳人を見殺しにして狂気の沙汰の好戦川柳に血道を上げたことは憤りに堪えない。これが高じてやがて、「大東亜戦争」の大詔を拝して、村田周魚の「川柳は戦争によって、狂句的低俗を脱

し、発展することができるといふ侵略的川柳理論に発展したのだ。民主勢力の微弱な柳壇では、他の全ての文学界と違って、未だに本格的な戦争責任の問題が追求されていない。我々は未だに石原青竜刀と堀口槐人の二人を除いて、彼らの反省のコトバを聞いていない。(青竜刀の自己批判は行動を伴って徹底したすぐれたものであり、敬服に値する)。筆者は近々、この問題を追求する権利を保留している。

一方、中国出先の日本人が結成していた「川柳大陸」では、「川柳人弾圧事件」に際して、編輯者高橋月南の主唱によって、反戦派柳人攻撃の追討ちをかけた。(石原・わが川柳史4・昭和30年7月号しなの)。「人民川柳」14号の林公寸氏の回想によると、当時「川柳大陸」に属していた河井茗八(卓抜な動物吟、大陸風物吟の天才的川柳人)は、弾圧のキツカケになった鶴句の「手と足をもちだ丸太にしてかえし」を「句そのものはよい句だねえ」と嘆じていたが、共々非難文を放ったという。この問題について、手と足を放たれる現場を目撃していた筈の大陸の柳人は内地の柳人よりも積極的にファッショの片棒をかついだようだ。当時の大陸浪人どもの醜悪な非人間性を見せつけられる思いだ。いまの日本にいるアメリカ人に輪をかけたものだ。——しかし、この弾圧事件は心ある一部に密かな衝撃を与えたようだった。「きやり」同人山本実道郎氏は、当時「川柳人」の後継誌に属していたが、井上信子先生と編集人鶴彬氏の検挙を新聞?で知って、万一を覚悟し妻にだけは事情を打明けその際に執るべき処置を指示しておいたが無事にすんだ。し

かしここで作句意欲を挫かれ戦時中句作を中止した。今「俳句」誌日野草城追悼号によって、草城が昭和十六年の俳句弾圧事件で同志が検挙されたことによって、身辺に脅威を感じ、いつも留置場の隣に住んでいるような気持だったと述懐していたという記事に触れ、戦時中俳壇を引退していた事実を知って、全く同様だったわが身を振り返って殊更感慨なきを得ない、という意味のことを述べている。(「木やり」昭和31年7月号「日野草城」)。

### 獄中の作句、橋浦氏が伝える

さて、話を野方署にもどすと、現在のよう拘留期限などない時分だから、留置は無制限に長びいた。元々犯罪事実も証拠もあるう筈がないのだから、当局も調書の取りようがなく弱っていたようだった。長い拘留生活のつれづれに、鶴、橋浦氏、平林さんは、生前の剣花坊と交際のあつた縁で、留置場で、時局風刺の川柳や狂歌をつくって打ち興じた。その一部は橋浦氏の記憶によって、最近筆者に伝えられたが、それはいつかの機会に紹介したい。

ところがここで重大なことが起った。それは、他の検挙者と違って、鶴のところには誰も差し入れにくるものがなかった。そのため彼は栄養不良になり、健康をむしばまれていったのである。

一九五六・一一・三 記 人民川柳会員  
 (「和」十一号) 昭和三十一年十一月発行  
 行IIより転載)



連載

## 新興川柳の軌跡

松原 秀河

(「ばんば」五十九年十月号より転載)

## (七)

## 死の迫った宮島竜二

金沢で別れた福村無一路から突然「僕は川柳を捨てる」と手紙がきた。(あれほど川柳革新に情熱を炎やしていたのに?) 鶴は無一路の心境が何のために変化したのか想像もつかなかった。この無一路の紹介で鶴は純粹の革新川柳家という宮島竜二に前後、三回逢っている。宮島竜二も若くして死んでしまったが最後に逢った時のことが「鶴彬全集」に載っているので転載する。

× × ×

僕は宮島氏と前後三回逢っている。今書こうとするのはその三回目の会見である。

久しぶりで金沢に出た僕は屋根と同じ高さの雪路を踏んで氏を訪れた。はからざりし、宮島氏は屍の如く雪の底に病み疲れていた。昨年(昭和二年)の夏逢った時の元気さは何処にも見られなかった。僕が枕元に座ると、しばらくして目を開きかすかに、そして苦しうに、またうごめくように言った。

「やっと来てくれたが今日は話が出来ない」それは余程耳をそばだてなければ聞きとれない声だった。そしてまたそのまま目を閉じて

しまった。

何分か経ってふと目を開いた氏は急に言った。

「大阪で半文銭氏と逢ったか」

「逢いました」

「日車氏とは」

「逢いませぬ」

「半文銭という人は何をしている人か」

「著述業です」

「ふむ：」

しばらく黙っていたが

「僕は生きている内に、せめて五呂八、日車氏に一度逢いたい：」

氏はまた目を閉じた。

それは仮死に陥るが如く僕という存在を忘れ去ったようである。逢えば口ぐせに、書けば筆ぐせに「僕はまだまだ死なぬ。きつと治る。治ったらうんと勉強して君と柳誌を出そう」といつも言っている宮島氏は、今度はそれを言わなかった。自分で「死」を予感していたらしい。

「枕元の本の間に夢村氏からの手紙があるから読んでくれ」

その手紙は『お送り頂いた創作を有難う、次の「影像」を短文字にするからぜひ何か書いてほしい』というものだった。氏は

「いまは何も書けないから：：と君から返事を出してくれ」

と言うのだ。僕は

「承知しました、それにしてもよく創作を送りましたね」

「うん、弟に書いて貰って：」

情けない限りだ。もうペンを持つことも出来ないのだ。

ないのだ。

「まだまだ書きたいことが山ほどあるのだが今となればどっちでもいいんだ」

答えるや否や忽ちはげしく咳きこんでしまった。

三十分も続いたのであろうか、咳が止むと嬉しうに

「ああ、咽喉のタンが切れてうれしい。病気をしているところな事も喜びの一つだと正岡子規も何かで書いていたが本当だ」

「子規は若くして死にましたね」

言ってしまったから僕は(しまった)と思った。宮島氏は表情も動かさず

「いくつだ」

と問い返した。

「三十七歳かと思えます」

「ふむ、でも僕よりずい分、年上だな」

宮島氏の淋しい言葉に僕は沈黙してしまっただ。今度は宮島氏が

「ニイチエは三十九歳だと思った」

「はあ、それから見れば芭蕉や一茶はずい分長生きしたんですね」

「そうだ長生きだった、しかし晩年の一茶はどんな風だったかな」

「やはり悟りに入っています。家を焼いて土蔵の中で中風の身をもてあましながら(美しくや障子の穴の天の川)と、うたったほどに

：しかし一茶の最後は悲惨らしかったんですね、啄木も悲惨でした」

「悲惨とはどんな意味の」

「物質的にです」

「では啄木はいくつで死んだ」

「二十七歳でした」

「僕より若かったな」

「そう若かったんですが随分と仕事をしてい  
ます、もっと生きていたら素晴らしい事を  
やったでしょう」

「いやどうなるか分からない。人間は年をと  
れば社会を避けたくなるものだ」

「そうかも知れませんが啄木はますます社会  
主義に入っていく人だと思えます。金田一京  
助氏も（啄木は晩年国家社会主義に変転し  
た）と言っていますから」

「ここまで話した時に宮島氏はまたひどく咳  
き込んだ。そして咳き苦しんだ揚句、闇に陥  
る如く目を閉じてしまった。僕はしばらくし  
て

「お大切に」  
と暇乞して帰った。そして四度目に逢った時  
はもう物言わぬ人となってしまった。

## (八)

(同十一月号より転載)

### 鶴彬、故郷を去る

この人こそ本当の革新川柳家だ——そう思  
い込んでいた無一路が「川柳を捨てる」と手  
紙をくれたまま消息を絶ってしまった。

その後無一路が「真の革新川柳家だ」と紹  
介してくれた宮島竜二も四度目に逢った時  
は、もうこの世の人でなかった。鶴がやっ  
と掴みかけた川柳への絆もここでプツリと切  
れてしまった。「僕が近づく人はみな向うか  
ら去ってしまう。僕には何か、そんな宿命の  
ような翳があるのだろうか？」十七歳の少

年、鶴の気持は深い冷い闇の底へ沈んでゆく  
ような思いだった。途方に暮れてしまった彼  
は、無一路や竜二のいない金沢につくづく嫌  
気が差して何処か別の土地へ行ってしまいた  
くなかった。

こんな時にふと思ひ浮かんだのは大阪に働  
いている、と伯父からいつか聞かされた従兄  
のことであった。「そうだ僕も大阪へ出て働  
いて見よう」やはり若さなのだろう。そう思  
うと一日も早く金沢を出たくなった。鶴は古  
ぼけた机の引き出し全部抜いて中にあるガラ  
クタを畳の上へぶちまけた。五呂八や無一路  
からのハガキや手紙、川柳雑誌やちびたエン  
ピツ、書き損ねた原稿、そんな雑多なものを  
掻き回しているに従兄からの年賀状が見つ  
かった。「これだ！」聞いていた通り大阪  
だった。「明日行こう」いくら頭がよいと  
いってもまだ少年の鶴、相手の都合を考える  
ほどの思慮分別はない。直ぐに当座の身の回  
り品を少しと、数冊の川柳雑誌や読み古した  
哲学の本、それに先生と別れる時に貰った広  
辞林などを風呂敷に包むと枕元に置いて床に  
もぐり込んだ。「これからどうしようか」や  
はり思い切つてまだ見たこともない大都会へ  
行くとなると、とりとめもなく心配なことが  
次々と心に浮かんでくる。工場の上にある四  
帖半ぐらいの部屋で仲々寝つかれない鶴が少  
し微睡んだと思うと、もう朝の陽差しがカー  
テンのない窓硝子に眩しかった。立て付けの  
悪い硝子戸をガタピシさせながら開け放ち空  
を見上げると白い雲がこれから行こうとして  
いる大阪の方向へゆっくり流れている。「ま  
るで僕のようにだ」鶴は嬉しくなつて思いきり

手を振った。昨日からの重苦しく申し掛かっ  
ていたものがすっかり消えて身も心も軽く  
なった。

「これから行く大阪にきつといい事が待って  
いてくれる」明るい気持になった鶴の心は訳  
もなく弾んで

「大阪の市郎さんの所へちよつと行ってきま  
す」

挨拶にきた鶴に伯父、喜太郎は無表情に  
「ふん：：そうか」

と言つたが思い直した。工場も不景気でどう  
にもならないしその上、「女工の待遇が悪  
い」とか「工場の設備が危険だ」とか小生意  
気な理屈ばかり言っている養子を持って余して  
いた所だし丁度、人減らしにもいい機会だ。

「お、向うにいい仕事があったら当分働い  
た方がいい。何といつても大阪は都会だか  
ら」

と汽車賃を握りめしに添えて出した。嫌な顔  
をされると思つていた鶴は思いがけない伯父  
の態度に「本当はこの人もいい人なのだ」と  
涙ぐんだ。

× × ×

風呂敷包みを網棚へ上げると伯母さんが  
作つてくれた握り飯を膝の上に広げた。日曜  
の金沢駅の朝はいつもと違い静かである。  
二、三人の駅員が事務室で朝の茶を啜りなが  
ら談笑しているし売店の男の人もゆっくり煙  
草をふかしている。水を打ったホームには鳩  
があちこちで餌を拾っている。とても地球上  
の何処かで悲惨な戦争が起きているとは思え  
ない「平和だな」鶴は何か割り切れないも  
のを呑み込んだような思いだった。

## 鶴彬川柳大賞歴代入賞作品 (三)

### ◆第九回 (平成十六年)

- 【鶴彬大賞】 過労死は視野になかった棒グラフ  
石川県小松市 表 洋子
- 【優秀賞】 豊作も凶作もない田が残り  
大阪府豊中市 平野 信子
- 【優秀賞】 飽食の意識は持たぬ医者通い  
石川県野々市町 板倉みのる
- 【佳 作】 カラフルな薬が作る長寿国  
石川県かほく市 竹内 勝利
- 【佳 作】 アメリカの自由ミサイル積んでくる  
千葉県船橋市 君島 孟雄
- 【佳 作】 棒切れのように粗末にする命  
石川県金沢市 中林 君子
- ◆第十回 (平成十七年)
- 【鶴彬大賞】 治りたい薬でいのち奪われる  
北海道芦別市 村垣 白鳴
- 【優秀賞】 悪の根を断ち切るメスが錆びている  
愛知県名古屋市長島 鍵人
- 【優秀賞】 敗戦を背中で語る亡父だった  
石川県かほく市 城戸 寿子
- 【佳 作】 十八歳戦死と刻む碑を洗う  
福島県本宮町 浦井 隆
- 【佳 作】 語らねば千人針をまた作る  
福岡県福岡市 時枝 京子
- 【佳 作】 病院が長寿社会の社交場  
石川県かほく市 橋爪無声子

### ◆第十一回 (平成十八年)

- 【鶴彬大賞】 アメリカの風が気になる日章旗  
山梨県増穂町 井上信太郎
- 【優秀賞】 風の子が塾に吸い込まれて消える  
三重県津市 松田 順久
- 【優秀賞】 マネキンが見つめる先は飢餓の海  
三重県亀山市 大野たけお
- 【佳 作】 まっすぐに生き不器用に死んでゆく  
愛知県知多市 高田 仁司
- 【佳 作】 手を抜かぬ母に無償の愛が有る  
石川県小松市 妻木 義山
- 【佳 作】 戦争も玉音も知り認知症  
石川県宝達志水町 三輪 彩
- ◆第十二回 (平成十九年)
- 【鶴彬大賞】 ひめゆりのいのちに誓う第九条  
石川県津幡町 野竹 貞子
- 【優秀賞】 九条も曲げてはならぬ昭和の日  
石川県七尾市 中山 北斗
- 【優秀賞】 宿命とあきらめきれぬ医療ミス  
静岡県浜松市 滝田 玲子
- 【佳 作】 格差社会命の重さまで違つ  
京都府舞鶴市 大西恵一郎
- 【佳 作】 原発の真相あばく激震地  
石川県能美市 東川 俊江
- 【佳 作】 昭和史の散つた命が忘れられ  
石川県金沢市 福島 文夫

## 映画「鶴彬 こころの軌跡」DVD完成

9月11日(日) 鶴彬をたたえる集いで発売予定

価格 2,000円 (税込み)  
予約受付中 (鶴彬を顕彰する会)





### 鶴彬川柳大賞歴代入賞作品 (四)

#### ◆第十二回 (平成二十年)

【鶴彬大賞】 偽善者の指が離れぬ核ボタン

石川県能美市 隅田 外男

【優秀賞】 賞味期限ばかり気にする冷蔵庫

千葉県千葉市 野口 一風

【優秀賞】 裏金も埋蔵金もある役所

兵庫県相生市 古沢 美子

【佳 作】 思いやり予算で太る星条旗

愛知県知多市 高田 仁司

【佳 作】 偽りのない九条に恩がある

石川県七尾市 長谷川さち子

【佳 作】 偽物をたらふく食べてメタボ腹

石川県宝達志水町 三輪 彩

#### ◆第十四回 (平成二十一年)

【鶴彬大賞】 介護の手愛の手みんな他人の手

兵庫県播磨市 東馬場美和子

【優秀賞】 切り捨てて切り捨てられて名は福祉

東京都新宿区 伊藤三十八

【優秀賞】 引き算に馴れ年金で生き続け

福岡県福岡市 伊豆丸竹仙

【佳 作】 百年の危機百年の借りで埋め

愛媛県松山市 除田 六郎

【佳 作】 散るあわれ知らぬ造花が咲き誇る

静岡県浜松市 仙石 弘子

【佳 作】 ご長寿を支えています紙オムツ

栃木県壬生市 三上 博史

#### ◆第十五回 (平成二十二年)

【鶴彬大賞】 消費税アップを霧の中に置く

宮城県大和町 織田 壽

【優秀賞】 九条が日本を守る抑止力

大阪府大阪市 江島谷勝弘

【優秀賞】 核を手に核を捨てると迫る国

岩手県盛岡市 餘目 忠吉

【佳 作】 原爆の日を待つ像の独り言

福岡県福岡市 酒見 敏子

【佳 作】 九条にお辞儀をしている百日紅

大阪府豊中市 谷川 生枝

【佳 作】 ニッポンが地球儀よりも傾いた

鳥取県米子市 門脇 一男

■発行 鶴彬を顕彰する会

■事務局 〒929・1215 石川県かほく市高松 キ5 (小山 広助 気付)

■TEL・FAX 076-281-1201 E-mail : turuakira@yahoo.co.jp

# 第13回 鶴彬をたたえる集い

◆日時/ 9月11日(日)/午後1時30分～4時30分

## ■ 碑前祭 (午後1時30分～2時)

### ● 場所 / 高松歴史公園・句碑前

(かほく市高松 甲6-1)

- \* メッセージ披露 \* 献句 / 鶴彬川柳大賞句  
\* 献花 / 参加者全員 \* 献吟詠 / 高松詩吟協会 \* 終了



## ■ 講演会 (午後2時30分～3時30分)

### ● 会場 / 高松産業文化センター・ホール

◇ 参加費: 500円 (身体障がい者は無料)

演題 『鶴彬～番組制作を通して』

講師 川瀬 裕子氏

〈プロフィール〉三重県出身。

立命館大学文学部英米科卒業。平成元年、北陸放送にアナウンサーとして入社。現在、北陸放送ラジオ局に所属し、ニュースから、ワイド番組・朗読まで幅広く担当。初の女性競馬実況アナウンサーとして、金沢競馬実況中継を行う。昨年度、高松町出身の川柳作家・鶴彬を取り上げた番組で日本民間放送連盟賞、教養部門で優秀賞を受賞。今年度、美川町出身のシンガー・浅川マキをテーマに番組を制作し、日本民間放送連盟賞エンターテインメント部門を地区審査一位となり中央審査会にすすむ。



## ■ 総会 (午後3時45分～4時30分)

### ● 会場 / 高松産業文化センター・ホール

- ・ 鶴彬を顕彰する会の総会を開催しますので会員、関係者のご出席をお願いいたします。
  - ・ 活動報告と会計報告 / 活動方針(案)と予算(案) 審議
- \* 会員を募集しています。  
・ 年会費 1,000円(団体 3,000円) ・ 鶴彬通信「はばたき」購読料 1,000円

主催: 鶴彬を顕彰する会 / 映画「鶴彬こころの軌跡」上映普及を成功させる会  
後援: かほく市教育委員会

\* 問合せ・小山広助(090-4323-1754) ・板坂洋介(090-6273-4114)

多数のご参加をお待ちしております。